

二〇年以上前の話です。プリンストン大学に着任したとき、比較文学科の学科長から、小説史の授業を担当してほしいと言われました。筆者は、虚構世界論や悲劇なら、自分の興味に近い題材なのですが、と言ってみました。学科長は、筆者の提案を検討しましたが、考えを変えることはありませんでした。そこで、仕事に取り掛かりました。

もちろん、それまでも小説はたくさん読んでいました。でも専門家としてではなく愛好者としてです。そしてここは慎重にいこうと、騎士道小説の陽気なパロディであるセルバンテスの『ドン・キホーテ』を最初の近代小説とする、通説の史観で考えていました。それでも講義の史的視野を広げるために、セルバンテスの挿擧のメイנטァーゲットとなった『アマデイス・デ・ガウラ』を読みました。『ドン・キホーテ』があの手の手ストーリーに引導を渡したんだよな、と、みんなと同じように思いこんでいたのです。

『アマデイス・デ・ガウラ』は、勇氣と忠誠心をありえないほど理想化しています。でも正直言うと、読んでみたらすごく好きなやつだったのです。そこで、半ば忘れ去られたようなジャンルのストーリーをもうひとつ、チェックしておかないとな、と思ったのです。セルバンテスが大好きだと言っていた、古代ギリシアの物語です。

そんなわけで、ヘリオドロスの『エティオピア物語』と出会うことになりました。たいへん美しい物語で、最悪の苦難を耐え忍ぶぞ、と覚悟した恋人どうしの冒険を描いたものです。そして肚はらに落ちたのです。どうしてこれを、セルバンテスが愛読したのか。どういうわけでラシーヌが、これを諷そとんじてたのか。なぜフィリップ・シドニー卿やスキュデリ夫人など多くの作家が、その様式を模倣したのか。それだけでなく、この作品を抜きにして小説史を語ることができない、ということもわかりました。当時、同じ結論に達していた専門家が少なくないことも確認して、心強く思いました。

長いあいだ、小説は絶対的に完璧な人物を登場させるか、完全に卑劣な人物を登場させるかのどちらかを選択してきたのだ、と筆者には見えました。一八世紀以降、近代小説と呼ばれるものは、登場人物の理想化を、部分的に避けてきたにすぎません。じつは近代作家も、非の打ちどころがなさすぎて現実にはありえない行動や、完全にばかげた批難されるべき行動の、新種を求めつづけてきたのです。小説は、いっぽうに人間行動の理想化、もういっぽうにそれになりたいするツツコミ、というふたつの立場のあいだの緊張のおかげで進化してきたんだな、と思いました。この緊張状態はまだじゅうぶんに解明されていないな、と思ひ、本書の執筆を決意しました。これはその改訂新版ということになります。

序章では、小説史の理論をいくつか検討します。そのあと第1部では、一八世紀以前に出版された散文

物語の諸類型について書きました。いっぽうには古代ギリシア小説と騎士道物語があり、模範的な行動に焦点を当てています。もういっぽうには滑稽譚・ピカレスク小説・短篇小説があり、こちらは登場人物の行動を批難することが多いものです。理想論的な語りは、厳格このうえない道徳規範に躊躇なく従う、強い魂の持ち主を主人公としていました。これにたいして反理想論的な物語では、共同生活の規則をこれまた躊躇なく破る、極悪人・悪たれ・悪漢（ピカロ）に強い関心を向けていました。この両極のあいだに悲歌物語や牧人文学、そして教訓性のあるタイプのピカレスク小説が、半ば理想論的で半ば批判的な中道を切り開いていました。

セルバンテスとその小説史における特別な位置づけについて一章を割いたあと、本書の第2部では一八世紀をあつかいます。作家がそれまでの小説のサブジャンル群を統合しようと試みた時代です。小説家たちは、完璧でありながら現実にいそうな人物を考え出すために、登場人物を英国の田舎などの身近な舞台に置きました。登場人物の内心の議論を記述し、登場人物にはおのれの繊細な心のうちに道徳律を見いだす能力があると主張したのです。その反面、反理想論は、滑稽小説のうちに花開きました。悲歌物語の様式には、不幸な愛を打ち明ける一人称物語というみごとな後継者が生まれました。旧来の理想論を取り戻そうとする試みからは、ゴシック小説が誕生します。

第3部では一九世紀を検討します。小説家は、模範的でありながら現実にいると信じられそうな人物を描こうとして、こんどは人間の行動を史的環境・社会環境に根ざした〔定着〕ものとして記述するようになります。そしてこの根ざし＝定着を強調するために、主人公を古代や未開の時代、遠国、そしてもちろん現代世界に設定し、その社会構成を注意深く分析しています。反理想論も新しい形をとって、人間の不

完全さを皮肉ったり、感情移入したり、軽蔑してみせたりしています。でも世紀末から次世紀初頭にかけて、小説家は唯美主義や芸術崇拜の影響を受けました。そこで人心の神秘に注目し、人間の孤独について新しい、きわめて悲観的な視点をとるようになります。本書の第4部で検討するモダニズムのさまざまな形によつて、そのような視座が發展しました。でも、人間行動を表現する方法はこれ以外にも生き残り、また新たに發明されました。二〇世紀とは、小説の制作が並外れて豊かで多様性を持った世紀だったのです。

この主題を網羅しようという野心はありません。小説史の主要な方向性を考察するにとどめました。ですから、すばらしい作家や作品をたくさん（とりわけ近い時代をあつかった章で）割愛せざるを得ませんでした。そういう作家や作品を、全体の動きの中で位置づけるのは、注意深い読者には簡単なことかと思えます。逆に、各段階で、特徴的と思われる作品を最低ひとつは取り上げ、その筋や意味を、ばあいによつては詳細に分析しています。

シカゴ、二〇一四年一月

## 序章

小説の歴史イストワールはサクセスイストワールストーリーのお手本だ。小説という文学ジャンルは、誕生こそ控え目だったが、  
れど、目覚ましい適応力・刷新力・拡大力・支配力をのっけから示してきた。転換期にさしかかるたびに、  
クレバーで効率のいいやりかたを見つけては、文化全体のなかで居場所を確保してきた。

とはいえ、小説がどうやって生まれ、どうやって育ってきたかについては、相変わらず議論の的とな  
っている。厳密な意味での小説は、歴史上比較的遅く登場した、近代の文学表現の典型である、という  
見かたがある。この小説観はとも広く流布している。啓蒙時代の思想が古めかしいドグマを一掃した  
と思われているのと同じように、近代小説は一気に旧式な物語方式に取って変わったと思われる。

「古い小説ロマン」と呼ばれることもあるものが、理想化された嘘くさい人物を描いていたのたいして、近代  
小説はもっぱら、現実世界の住人の日常生活に関心を寄せていくことになる、という説だ。ひとりの作家